

野間宏全集

第十卷

野間宏全集

第十卷

筑摩書房

野間宏全集 第十卷

一九七四年五月三十日第一刷発行

著 者 野間宏

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一(代表)
郵便番号一〇一―九一
振替東京四一二三

本文印刷 晄印刷株式会社
製本 和田製本工業株式会社

目次

青年の環 4

第五部

第一章

逆転地が

茶色の部屋

第二章

伊達男の哀れ

二、三日の涼風

秘密と秘密（一）

秘密と秘密（二）

第三章

赤い屋根

屍衣と掛引き

家の外・家の中

影の領域

『青年の環』について

「青年の環」と私

420 415 358 332 295 258

青年の環

4

影の領域

第五部

第一章

逆転地が

一

後頭部の右側に大きな茶色の禿があつて、それが頭をさげるときに気味悪く髪の間からすけて見える柳川古書店の親爺は、いかにも、わてらはこの通り本をば丁寧にあつかひますのやと見せつけているとでもいうような、しかしすでに習慣になつてしまつた手なれた手つきで、一冊の大型本を紙包みにしながら、いつもの一寸、嘔氣をもよおすような商売熱心というやつを、かまうことなく押しつけ、しかもそのなかに適当なお愛想を巧みにつつみ入れている弁舌を、大道出泉の前にひろげつつける。「これを、ようや」と今朝がた手に入れましたな、それで……さっそくお電話いたしましたので……丁度御在宅でよろしおましたんでっせ、いえ、なに他にまわすなどいうことは、ゆめゆめ考へてはおりません。……何度も言うようにで恐縮でございます

すが、どうか、こんなものと、おっしゃられはせんかという氣もしまして、それでは手びかえようかと考へましたんでございますが、いや、お氣にめさんときには、こっちで長く持っていて、決して持ちぐされになるようなものではないとも考へて、落しましたわけで。いや、これは決してそんな持ちぐされになるようなものはありません。しかし、およろしかったようで……へい。……」小さな四角の顔をした親爺は、たしかに一種の臭氣を放っているときさ言える商売熱心を何よりも売物にするだけあつて、實際商売熱心でもあり、また古書にも意外と通じているし、狭い構えの店ながらも、一番奥の一角には洋書をならべて、特別の客というべき客をとらえる工夫もして、その特別の客が店に來た時には必ず自身が応対し、絶対に店員たちを近寄らせることがなかった。

「まだずつと、この手のものを、お集めになりますので？いいえ、そのつもりで、方々に声をかけておりますよつて、近いうちに、またはいると思ひますけれども、その時はまたすぐにお知らせいたしますぜ。……いいえ、わざわざここまで、出向いて頂かんでも、こっちから持つて参じましたのにな。しかし、これを扱う本にはいまは特別に眼がひかつていますな、それが恐いもんで、よいものとなると、とんと外に出まわりませんもので。……あすこにはあるやろ思うてな、よう勉強してるいう噂とて仲間うちにあたつてみますんやけれども……こっちがあすこにはあるやろ思うてるところに案外にのうてな。思ひもかけんと

ころに意外なもんが何冊かそろてるいうような按配でして、なかなか手間がかりますんでんな……しかしな、こうして、たまにはひょこんと市に出てるいうこともありますよつてな、もう少し、お待ちいただきましたら、おおよそのところは、みんな必ずとりそろえてみせますぜ。なに、大道はんのことですよつてに、そら、こっちも特別に力を入れさせてもらうてますのや。……しかしこの間のあの『特殊部落一千年史』、あの方は、この間も申し上げましたように、うちが取り扱うたいことは絶対に御内密に願います。それだけは願うときます。ほんまにうるそうなりましてな。……鑑札を取り上げるいうようなひどいことにならんともかぎりまへんよつてな。……くわばら、くわばらですがな。……へ、へ……なに、大道はんに限つては、そのようなことは、どのようなことがあつても大丈夫と、こっちは安心しておりますがね。」親爺は本を包みおわると台の上の紙幣束をとつて下の引出しの右隅のところに入れ、釣銭をさがすのに手間をかける。

「柳川さん、それはどうか……大道はんに限つて、というようなことを考えていたりしたら、それがまたはずれてやな、不幸をまねく元になるというのが、世の中には、よあるの……」大道出泉は今日はこの柳川古書店の親爺とは出来るだけ話ほしないようにして、本を受け取つたらさつさとここを立ち退いてと考えていたのだが、この最後の言葉を色模様入りのハンカチが何かのように、親爺にひらひらと大げさに振つて見せられては、最初のその心づも

りにもかかわらず、すぐにそれを破つて、親爺を一寸ばかりからかつてやらないわけにはいかなかった。「近松あたるの脚本は、おおよそのところ、みなそういうふうに出てるがね。」

「大道はん、なんですよ。ほんまにいやですぜ。おひとのわるい！ 大道はん、そう、ひとを意地悪うに、おどかすもんやあらしまへんがな。……こっちは大道はんのためにあぶない橋をわたつてからに、こうして手に入れてきましてんやないか。……え一寸、ああいもうんを手離すいうひとは、いまは、あらしまへんがな……それを、こっちはほんまにおがみ倒して、それともう言葉通りでつせ。三拝九拝しておがみ倒してからに、手に入れて来ましたんやないか。……え、そのこっちの努力を一寸でもくんでくれはつたら、そんな言葉はよもや出るわけないと思ひまんのやけどな。……それにな、おどかすにも、ことと場合によりまんがな。……え、大道はん。」

「それだぜ、僕もいまそれを、そいつを言おうと思つてたんや。ことと場合による、いうことね。……ことと場合によつては、ひとはな、どういうことになるやら、それは判らんということやな。……ついこの間、複雑怪奇というおかしい言葉をつくりだして、世の中のもの笑ひになったお方もある……わけやしな。」大道出泉は、親爺の角形の一寸した鼻も、また四角と言つてよい精力をあらわに感じとらせる顔が、いよいよ弱気にゆがむのを氣持よげに眺めたが、彼はもちろん、それ以上、この親爺のうちに攻め入る

うなどという考えは少しも持つてはいなかった。彼のうちにあっていま大きなと言ってもよい場所をしめているのは部落という問題であつて、それとあの田口吉喜とを一体どう結びつけたらよいかということだったのだ。それは先月来、彼のうちのじつに大きな場所を占領しつくしているのだが、彼がここの親爺の手から部落について書かれた研究書をすでに十冊以上手に入れて、それに取りつかれるようにして読んで行くにつれて、それは、いままでもよりも一層、解きたいものとして彼に迫つてきて、時には彼をまったく圧倒し去るかのように大きく彼の内でふくれあがつてきているのである。とはいへ、それは彼が、自分がいかに解こうとしても解くことが出来がたいような不可解な問題であるとして来たからといって、不思議なことには、決してそれによつて自分がこれまで、彼が現に追いこめられていったというべき窮境のところまで追いこめられるというような思いはすることはなかったのである。

「大道はん、ほんまにもう、そのへんで、おやめになつて頂けまへんでっしゃるか。からかわれてな……毎度のことやけれども、なぶられてるとようわかつてますけれどもな、こんどことはそんな冗談ごとですませるいうようなことではないので。……」

「ことが鑑札がとりあげられるかどうかという、もう、うちにとしては、何も申すところのないいう大けな問題にかわつておりますもんでなあ……というようなことでっしゃろ……よう解つてまんがな。」

「ひやあー、それやつたら、そこまでもう、やめてもらいまひよう、たのんます。え、大道はん、よろしますな……」。大道はんに、そんな鑑札、鑑札などと持ちだされたりしたら、もう、もう、こっちゃは、お手あげも同然でんものな。……はい、これで。……まいどありがとうさんで……ございます。親爺は、台の向うから廻つて出て来て黒ズボンのポケットのなかをかきまわし、小銭を手の平にのせて、顔をそれにじつと近づけるようにして確かめ、一つ一つ台の上にならばはじめた。

「なに、そういうことなら、その方は、この辺りでやめることにしてね。」大道出泉は、包まれた書物を受け取り、釣銭をワイシャツのポケットに音をたてて流し込んだ。

「この間の『特殊部落一千年史』と喜田貞吉のはありがたかったけれど、ほかのは、まあまあで、何を書いているのやら、分析してるのやら、解らんいうようなしろものが主やつたんで、一寸、せつかくの意欲をそがれたけれど、この『差別感情とタブー』というの、最初の序文のところはどうも、ただだけんのやけれど、面白いものが出てくるかも知れんという気がするな。」

「さようございますか。それやつたらよろしますのやけれども。……これもさっきも申しましたように最初はほんところ、わたしは一寸、どうやらかと思つてな、思案しましたんですがな。しかし、どうやらお氣が動きになられたようで、ようやく、よかった、よかったと、こう思つてる次第で……いや、古書を取り扱つて、この、よ

うやっとなんやらにぶつかってからに、どうやらかなと思案しながら、思いきって、せりおとして……それがどうやら、まあまあ、喜んで頂けたということになると、もう、この辺りが一番うれしいのでしてな。それやよってに、この商売はやめられまへんのでんな……その気持、大道はんにはわかってもらええる思いまっけどな。……そら、お買ひになる側では、また、大金をとりよると、こういうお氣持が先にお立ちになるいうこともあるやろと思いまっけど、しかし、まずまず、あ、あ、これはよかったな、どうやら御満足がいけたようやな、ということが、さっとこっちの心にひびいてまいります、そこところが……それはまた格別でしてなあ、そういうもんでっせ。……そら商売ですよってに、儲けさしてもらわんことにはなりまへんけれども、その辺のところになると、そろそろ商売を離れてしもうております。そら、これは、われわれ仲間うちであつまつた時にも、一番よう出る話題でしてな。……『特殊部落一千年史』、あれは、それは声高うは言えませんが、この前も申しましたように、あれにはわたしも一寸鼻高でしてな。……あれの改訂版の『特殊部落史』の方は、これもいまは同じようにいかにことになっておりまんのやけど、まだ、手に入らんことはあらしまへんのや。しかし、『特殊部落一千年史』となると、それはもう、めつたなことでは手に入りはせんので……。あれを、あるところで交渉して、ねばりにねばって、一日がかりで口説きおとして、店にかえってきた時は、つくづく、われながら、こんな根氣

がよう出たもんやなと思ひましたな。これも、それはもう、大道はんが、ぜがひでもと言われて、たつての御注文でしよってに、どうしても、なんとかしてさしあげたい、こう思うて、それでできたことだすな。……ほんまに、そういうことになりますので。はい……それでは、今日はこれでおよろしいので。洋書の方には、何か御入用のものは……？」

「解つたよ。充分、解りましたよ。……しっかりと儲けてもらわんことには、いかなのでなあ。洋書？　いらんねえ……いまはもっぱら、この方を集めてもらいたいな。いや、大丈夫だよ。……どこから手に入れたとか、なんとかいうことは、絶対に口にはせんからね。……その代り、柳川さんの方でも、こういうものを僕が集めてるなどいうことは言わんようにしてもらいましょか。……それから、この間たのんでおいた中江兆民の『新民世界』いうのは、まだ手にいらんのやな。……新村さんの『賤民名物考』というのがあるらしいのやけれど、それもこの間、一寸、言ううていたんやけれど、あれは正確には『賤民名称考』いうので、『経済論叢』という雑誌に出したものらしいのや。それで『経済論叢』を探してはしいのやな。それに、こいつはつまらんのやないかと思うのやけれど、高田保馬の『融和問題の考察』というのなども、出来たらほしいな……値段の方は前から言うように、はずましてもらうよってな。」

「へい、へい。承知しております。高田保馬先生の『融和問題の考察』でございますね。……いや、中江兆民の『新

民世界』、これはいま方々たずねていますが、あれは何分、新聞に出したもので、一寸手に入りにくうて……。いや、しかし、そのうちに必ず手に入れて差しあげます。ほかならぬ大道はんの願いですよってな。……しかし、何でしょ。うかな、大道はんが、どうしてこの手の書物にいま凝り出さへったのか、と、この間から考えておりますんですが、何かこの問題で発表されるというお考えでもお持ちですの……」親爺は台の横から身をはなし、出泉の耳元のところに口を寄せて、急に低い声をつくつくつづけるのである。その顔には明らかに、忠義だてとでもいうことの出来る、一寸、真剣な面持が行きわたる。おひとつ、いかがで？というかのように親爺は口付煙草の箱を差し出したが、大道出泉はいらないからと即座に断わった。彼はあの大野金舟が、先日、田口の出身のことについて彼に明かした時、いかにもこれと似た表情がその顔の上にあったのをいまはつきり認めて、顔を後ろにぐっとひいた。「もしか、何か発表になられるというようなことでしたら、よほどお氣をつけにならんことにはいけませんぜ。それは研究されるのにはまことに興味のある問題でございますがね。なんでもこの間、わたしが、この方面の本を集めているのを知った同業の年寄りがきかしてくれましたんですが、いくら研究ということでも、無闇なことは書けん、それをもしやるとしくじって大変なことになる……。××大学の歴史学の辻谷博士、おいでになりますな。……あのお方も、ほんの一寸したことで大勢のものに押しかけられて、とうとう最後

には、一筆、わび状を書かされたということですよってな……。もちろんわび状だけではすまんいうことで……」

「そういう言い方はよしでもらうよ。無闇なことと言って、その書く立場がどうかということやないか。水平運動の差別糾弾というのは、そんな無闇なことは、これまで読んだところでは、全然やってはいない。これは僕がいままで読んできた限りのことやけれど。……差別的なことを書かれて、それを糾弾するというのは、そら当り前のことやないか。そうやろう。」大道出泉は突然、怒りが自分のなかではげしく、一匹の輝く鱗をもった魚のように跳ねるのを感じて言った。その語気はすでにひとりではげしくあがっている。しかし相手は好意をもって言おうとして予期することのない、わけの解らぬ怒りにふれて、しばらく呆氣にとられていたが、やがてすぐに勢いに押されるかのように言葉をにがしにかかる。

「いえ、いえ、わてはその別に、どうこうということは言うておりませんので……。ただ大道さんのためを思うて、一寸心配になったことがありましたもんでな、言うたげといた方がええやろ、こう思うてな、言うたことな。」

「しかし僕は別に、何かこのことで発表しようとか、そんな考えは全然持つてはいんのやけれど。……ええ、そんな考えはまったく持つてはおらんので。」

「いや、それですと、別にその……。わての心配もなにもいらんわけ。いや、わては、別に、そのことでどうのこののということを言うてはおらんので。そうでっせ。……」

それはそうなんですか。……そら、わてらは商売のことから言えば、それで、お客はんの言う通りに、この本ないか、言われれば、はい、ここにございます。この本探してんか、いそいでんねん、言われれば、はい、何月何日まできつと探してきますところ言うて、やっておればよいわけ。しかし、ずっと御鼻眞にしてももうてます大道はんのことですもん、それで、いろいろと心配もいたしましたもんで……」

「もう、よいから。柳川はん、それはもう、おいところ。」大道出泉は上から抑えるように言った。

「はい……そうしていただきましたら……わたしらも……」

「それでは、さっきの頼んだやつ、出来るだけはやいところ手に入れてほしいね。」大道出泉は柳川古書店を出て、千日前の方へ向かって、ほこりっぱい、日に乾ききった日除け幕を軒並みにつき出している店舗のならんだ道を歩きだした。彼の心はいま、手に入れて右手に持っている「差別感情とタブー」のゆえに少しばかり弾んではいたが、とはいえ考えてみたところ、おそらく、これによってもやはり多分、彼がいま内に持っている部落の存在と田口吉喜のこの二つを一つに結びつけて考えるところ問題が、解決に近づくなどとは思えないのである。

第一篇 タブーに関する一考察、第一章 タブーの意味及性質 一、「タブー」という語の由来 一、「タブー」の語義 三、タブーの性質 (一)タブーの浄及不浄性 (二)タブー

の直接及間接性 (三)タブーの危険性 (四)タブーの感染性 第二章 タブーの種類 第三章 タブーの起源 第四章

タブーの意義 第二篇 部落の由来とタブーとの関係 第

一章 一、人種説 (一)唐、韓民族説 (二)蝦夷俘囚説 (三)隼

人族説 (四)オロッコ族説 (五)猶太民族説 (六)マレイ民族説

二、異人種説批評 (一)部落源流の問題 (二)差別理由の問題

(三)名称の問題 三、境遇説 (一)名称由来の問題 (二)穢多し

との説 (三)餌取説 (四)部落源流の問題 (五)差別理由の問題

第二章 上古の賤民とタブー 一、社会組織 二、部民

三、牧畜業の部民とタブー……大道出泉の頭にちらちら動くのは、柳川親爺の後頭部の髪の下からすけて見える茶色の汚ない禿と、先刻ゆっくり眼を通した「差別感情とタブー」の目次のなかにならんでいた文字の列である。彼は立ちどまって、その場で紙包みを解いて、なかの書物をひら

き、その「部落源流の問題」のところに一刻もはやく眼をそそぎたいという気持にとらえられたが、やはりそれは実行しなかった。彼は不意に、先日、道頓堀の朝日座の前のところを歩いていて、かつて彼があざむかれて靴の半張り皮をはぎとられ、べらべらの豚が犬の皮をそのあとにはりつけられて、そのうえ法外な金を要求され、ついにとりあげられてしまった時のことをありありと思い浮かべたことを思い出し、もう一度、その朝日座の前の通りの共同便所のある空地のところに行ってみたいと考えたからなのである。あの、油液のなかに長い間とっぷりと漬けられていたと言ってもよいような頭と額と髪の毛をした荒くれた男た

ち。頭から、額から、髪の毛から、油の滴をほとほとたらしめているような風体をして彼のまわりを取り囲み、彼の靴を無理やりにあつという間に脱がせたあの男たちを、もう一度自分の眼で、しっかりと見たいものだと思ふのである。「さあ、さあ、おとなしゅう、金を払いはんのや。え？ 払いはなれ。払わずにはすまんのやぜ。え、この靴をつくったもんも、わしらの仲間や。え、水平社を知らんのか。え、えったのこわいのを知らんのか。」彼等はこのようなに彼に向かって言ったのだが、このように言った彼等をもう一度自分の眼で確かめたいと彼は思うのである。とはいへ、先日彼が道頓堀のそこを歩いた時には、彼等はそこには出てはいなかった。……しかし、それはもちろん当然のことであつて、彼が彼等に出会つて被害を受けたのは、すでにもう五、六年も前、いや少くとも三、四年も以前の事なのではないか。彼等はすでにずっと前にもっと別のところにその場所を変えてしまつたか、それとも警察にあげられてつかまつたか、或いはまたそんなちっぽけな事ではなく、もっともつと大きいことを考へつて、いまはそいつの方にすっかり移つてしまつてゐるか、そのいづれかではないだろうか。『いやいや、そういうことではなくて彼等もまた兵隊にとられて……そう、兵隊にとられて、そう、おおよそのところ、やはりそいつやないのかな……兵隊にとられて、それで戦地へひっぱり出されて、それでそこにはいんというふうになつたんや……ないのかな。』

大道出泉は千日前の停留場のところを出て右に曲り、朝日座横に出て、すじ向かいの下方に共同便所のあるその前の例の一寸した空地のところを見てみたが、そのところにいまもあるのは、以前と少しも變りのない牡蠣舟の立看板だけであつて、やはりそこには誰一人彼の求めるかつて露店をはつていた人影などを見ることは出来なかつた。彼はしばらく朝日座の前に立つて、いまは人通りだけは絶えずあるのだが、彼の探す人たちが誰一人としていないそのところにじつと眼をやり考へていたが、いま何故か彼にはあの油液のなかに体を一日中つけて頭から額から髪の毛から、ほとほと油の滴をたらしていると思へたヤットコや靴の道具を持ったあらくれ男たちがこのうえなくなつかしい氣がしてくるのである。「さあ、おとなしゅうにその左の方を出しなはれな。え、靴いうもんはな、蹴るために出来てるもんやあらしまへんで。蹴るように出来てるのはな、蹴球のとき履く靴だけや。え、靴も、わしらの先祖がつくつたけど、いま、あんたの履いてる靴も、わしらの仲間がつくつたんや。そやよつて、それが悪うなつてゐるのを黙つてみてられんのや。さあ、だしなはれ、おとなしゅう出さんや。」ヤットコを大きい手でつかんだ男のこつた顎が、自分の顔の方にぐつと押しつけられるのが彼にはいまもはっきりと見える。……しかし彼等はいまそこにはいない……彼等のかつて残した影のなかを、いま、通りをいそぐ白ワイシャツの男たちが、簡単服の女たちが、横切つて通りすぎる。

大道出泉は道を引き返し再び千日前の方に出ようとして、先日、そこを通りすぎ、電車道路のところまで出て、また道頓堀筋を後戻りしてきて公衆電話を探し、それを使って田口の妻のさき子に電話を掛けたことをちらと思ひ出した。……すると彼のうちにたちまちにして動いて来るのは、田口に対する限りない憎しみと、それとともに彼のうちに広がる何ということはない、もはやあいつを上から取りおさえることなどは、いとまたやすいことではないかというようない種類の優越感とも言ふべきものである。『さき子は、田口がまだこの俺が田口の家を突きとめて訪ねて行ったことを知ってないと言っていたが、しかし田口のことだから、ひょっとすると、あの小山のおきんさんのところで、この俺のことをすでに聞きとってしまったているかも知れないのだ……そう、そしてそれは当然、田口としてはあり得ることなのだ……』大道出泉は、田口の家奥にはいり込んで大ダンスの引出しを開けてそのなかに見届けた、あの冷凍の魚か何かのように並んでいた皮の変色したグローブと、海藻のように周囲だけがよれよれになっている大きなめし皮とをはっきり思い浮かべ、部落とは一体何なのだという、ここ、二、三日、まるで口ぐせのように彼の口から出てくるこの言葉をいまままた呟いた。『やはり、おきんさんのところへ行ってみよう、ひょっとすると田口の奴、もう、次の計画を、あすこの家を中心にしてやり出してるかも知れん。』……すぐにも行って、そいつを確かめて、そうさせんように、喰いとめなければと、彼は自分を

小山のあの木津川の近くの家の方へとぐんぐん押しやるものが、内に強く動きだしてくるのを感じなければならなかった。そして彼のうちにぐるぐると燃え上ってくるように思えるのは、あの隅の仏壇の両脇にともついていた黒い太い芯を持った日本蠟燭の炎であって、しかもその炎に照らしだされるようにして見えてくるのは、小山の可愛がっていた妹の落目になった建築家の亭主の顔と、どこかの銀行の支店長だというその親戚の一人のきちんとした背広姿なのである。もちろん、このゆらゆらとゆれる炎のなかに現れてくる男たちの姿と言っても、彼はかつて一度も見ただけではないわけで、ただおきんの話を聞いたというだけで知っているというにすぎないのであって、まことにうすぼんやりしたものにはすぎなかったが、それでもそれは次第にそれなりに一つの形をつくり出して、やがておきんの、あの婦人際になって急に年寄りじみて見えだしてきた、やつれて深く皺の刻み込まれた、いかにもさびしそうな顔やその鳥類の鳴き声に近いと思えた涙声などと一緒になって、大道出泉をいまあの小山の二階の部屋へと、強い力をもって招きよせるのである。『はやく、はやく、一刻もはやく、さもないと、あの田口の奴がどんなことをするか解らんぜ……いや、もうすでにそいつは、はじまっているかも知れんや。……しかしやな、今度はそうはさせせんぜ。もはや、どういふことがあっても今度はそうはさせせん。この俺が、必ずあの田口をとりおさえてみせる。きつと、俺はやってやる。』大道出泉は自分に言った。彼は千日前の停留